

ディビジョン番号	19
ディビジョン名	化学教育

大項目	2 初等中等教育
中項目	2. 5 大学入試と化学教育
小項目	2. 5. 1 高等学校の授業に与える大学入試の影響

概要
<p>いわゆる進学校では、学校の授業が大学入試対策に収束せざるを得ない状況が続いている。そのため、講義や問題演習の時間が優先され、理科（化学）では、実験・観察が十分実施できないなどの弊害も生まれている。</p> <p>一方で、これらの状況を改善するために、日本化学会では全国の大学入試に出題された化学の問題を検討し、提言を行う「入試問題検討ワーキンググループ」などが活動を行っている。</p> <p>今後、少子化が進み受験生が減少する中で、大学の方針を表現する入試問題の持つ意味は大きくなると思われる。</p>
現状と最前線
<p>理系進学を目指す生徒に対して、充実した理科（化学）教育が行われるべき進学校においても、現実には大学入試対策に重点をおいた授業を優先せざるを得ない状況が続いている。特に、塾や予備校がない地方の高校では、学校がその役割を果たす要請があり、いきおい理科では実験・観察を実施する時間が不足している。昨年度明らみに出た、世界史などの必修教科・科目の未履修問題が進学校を中心に発生したことも、事態の深刻さを伝えている。理科においても「理科総合A」などの必修科目をカリキュラム表に記載しながら、実際は「化学Ⅰ」などの授業を行っているケースもある。都立の進学校の現場でも「3年生は、授業を受験対策と捉えている。選択科目の説明会で「化学Ⅱは受験に関係なく授業を展開する」と宣言したら、受講者は半減した。」「3年生になると通信添削を受講する生徒が多い。その解法を質問する生徒があり、高校の教員が通信添削業者の下請けのようになることがある。」といった、状況が報告されている。</p> <p>また、授業で使用される教科書についても、より詳細な内容を記載したもののほどよく売れる傾向がある。これも、教員が大学入試対策として有利なように配慮した結果だが、1社の教科書だけにしか掲載されていない内容を、入試問題として出題してしまう大学もあり、その結果、他社も記述内容を増やす「悪循環」に陥っている。そして、高校の現場のゆとりはますます失われてゆく。最近、認められるようになった「発展的内容」の扱いでも、今後そのまま入試問題として出題されてしまうなどの問題が発生する恐れがある。</p> <p>このような状況の改善のためには、入試問題を作成する大学側の出題者の力量が問われるが、出題された入試問題を評価しようという動きが各地でみられる。</p>

例えば、日本化学会では1990年から全国の大学入学試験に出題された化学の問題を検討し、その評価を「化学と工業」や「化学と教育」誌上で報告してきた。さらに2001年からは、継続してその年の入試問題を検討し、提言を行う「入試問題検討ワーキンググループ(WG)」と、過去の報告を集約し、よりよい入試問題を模索する「大学入試21WG」に分かれて活動を行っている。

今後、少子化がさらに進み受験生が減少する中において、入試問題の持つ意味は少しずつ変化してくると思われる。大学側には、高校教育の実態を十分に理解した上で、その大学の方針を示す独自性あふれる入試問題の作成が求められることになる。そのためには、前述のWGのような高校と大学の教員の積極的な交流・連携がますます重要となるだろう。

<参考文献>

- ・ 入試問題検討WG, “化学の大学入試問題を考える(14)”, 化学と教育, 51, 75 (2003)
- ・ 伊藤卓, “気になるわが国の大学入試”, 化学と教育, 54, 127 (2006) など

将来予測と方向性

- ・ 5年後までに解決・実現が望まれる課題
学習指導要領・教科書の改善(内容の精選と削減)
大学入試制度・問題の改善(高校教育を理解し, 大学の独自性を示す問題の作成)
- ・ 10年後までに解決・実現が望まれる課題
学習指導要領・教科書の抜本的な改善、
大学入試制度・問題の抜本的改善(問題作成委員の専門職化)

キーワード

大学入試 学習指導要領 教科書 塾・予備校

(執筆者: 梶山 正明)